

古英語強変化動詞とその同根語における史的そして語源的な問題 Historical and Etymological Problems in Old English Strong Verbs and their Cognate Words

森 基雄
Motoo Mori

1. はじめに

本稿の目的は、古英語における強変化動詞の一部とその関連語の中にセム語起源のものが存在する可能性、そして強変化動詞の変化表の枠外にある同根語の中でも主に *ti*-抽象名詞 (*ti*-Abstrakta) と呼ばれる名詞類におけるアプラウト (Ablaut、母音交替) の状況と *ti*-接辞の現れ方、そして最後に長年の議論となってきた強変化動詞 7 類について、本来の 2 音節から 1 音節の過去母音が形成されるに至った過程を中心に論じることである。

2. セム語起源の可能性が指摘される語：強変化動詞を中心に

2-1 主に意味と子音の対応から見たセム語起源の可能性

Vennemann (1998、2000、2002a、2002b、2002c、2004、2006) によれば、古代ゲルマン諸語の語彙にはセム語起源の借用語が含まれている可能性があるという。彼は古英語を含む古代ゲルマン諸語におけるその該当例と思われるものとそのものとセム語に該当すると思われる実例との間にグリムの法則と同様の正確な子音の対応関係を導き出すことにより、自身の主張を裏付けようとしている。そしてその中には強変化動詞に属するものも含まれており、強変化動詞に見られるアプラウトは印欧祖語を出発点として論じられるのが常ではあるものの、そのアプラウトを示す語根そのものの中に実はセム語起源のものがあるという。もしそうであれば、まさにそれはセム語起源でありながら語形変化においては完全に印欧語族の中に組み込まれてしまい、それが本来語なのか外来語なのかも識別が困難な状況となっていたと言えるであろう。

まず、Vennemann が挙げている例の中から強変化動詞に関わる、あるいはその可能性が考えられるものを以下に取り上げて論じていくことにしたい。

Semit b > Gmc p

Arab *ḍrb* 'to hit'、OE *drepan* 'to hit' (OS *-drepan*、OHG *treffan*、G *treffen*、ON *drepa*)。

さらにセム語は時制変化における母音変化についてもまたゲルマン語との部分的な類似を示す点は注目に値するであろう。すなわち、アラビア語の直説法 3 人称単数男性未完了形 *ya-ḍrib-u* に対し、OE *drepan* の直説法 3 人称単数現在が Gmc **drepiði* > OE **driþp*、G *trifft*、アラビア語の直説法 3 人称単数男性完了形 *ḍarab-a* に対し、古英語の直説法 3 人称過去単数は Gmc **drap-* > OE *dræp* (OHG *traf*、ON *drap*) である。

借用とする見方が正しければ、借用語であるにもかかわらず、時制変化では 5 類としてのアプラウトに従い、OE

drepan ~ dræp ~ dræpon ~ drepn と変化するようになったということになる。なお、過去分詞としての一般的な形は5類としての drepn であるが、4類型の dropen も見られる。

OE drepan がセム語起源であるとすれば、変化表の枠外でもアプラウトによる派生語として一般的な5類型の drepn ではなく4類型の dropen と同じ Gmc u を語根母音として有する drype ‘Schlag’ < *drupiz のほか、古英語以外でも延長階梯を示す ON dráp < Gmc *drēpan のような例が見られるのは、それとは認識されないほど古い借用語であったが故のことなのかもしれない。

Semit d > Gmc t

Akkad madādu ‘to measure, to survey’、Hebr l-mdwd [li-mdod] ‘to measure’、Hebr mydt [midat] ‘measure’ (名詞)、OE metan ‘to measure’ (OS metan、OHG mezzan、G messen、ON meta、Go mitan)。これはアプラウトにより5類として metan ~ mæt ~ mæton ~ meten と変化する。

Arab šmd ‘to strike, to throw’、OE smītan、E smite (OHG -smīzzan、G schmeißen、OFris smīta)。

smītan はアプラウトにより1類として smītan ~ smāt ~ smiton ~ smiten と変化する。さらに Arab šmd と対比される OE smītan のもとの意味に注目してみたい。OE smītan の例証される最古の意味は「塗る、汚す」であるが、その後 ‘to strike’ という意味でも出現する一方、Seebold (1970) によると、OFris smīta の意味は「投げ(つけ)る」であり、まさに G schmeißen の意味そのものである

Vennemann (2004: 603) は、恐らく「何かを投げつけたり、たたいたりして、打撃を与える」がこの動詞の最も基本的な意味であり、「塗る、汚す」はそこから発達した二次的な意味であるとしている。さらに Seebold (1970)、Vennemann (2004: 607) は、Lat mittere ‘to let go, send, throw, hurl’ と smītan は同族語であると考え。すなわち smītan がセム語起源であるなら、Lat mittere もまたセム語起源ということになる。印欧語族本来のものとして見た場合、OE smītan と Lat mittere では語根末子音の対応の点で明らかに矛盾が生じるが、Vennemann (2004: 607) はセム語根 šmd とその変異形 šmt がもともになっていると考える。

このほか Vennemann が同族語である可能性を論すべきものとして挙げているのが、Gmc *smīpaz > OE smīp、E smith、G Schmied である。smītan とこれらは、語根末子音は別として明らかにはっきりとした音韻的そして意味的な特徴を共有しているかのように見え、smītan の i と smīp の i は強変化動詞1類に見られるアプラウトの関係にあると見なすことが可能である。しかし語根末子音についてはゲルマン語の音韻法則では古英語のこの2語における t と p を関係づけることは不可能であるため、これらを印欧語族本来の語として語源的に結び付けることはできない。ただしこの2語が印欧語族ではなく他の語族からの借用語であるとすれば、語源的に結び付けることは可能であろう。すなわち smītan と smīp はそれぞれセム語根の変異形 šmd と šmt に由来し、どちらもゲルマン語子音推移 (d > t、t > p) を経た結果であるのかもしれない。あるいは smītan はゲルマン語子音推移以後に借用された šmt に由来するのかもしれない。

smīp という語が古いものであることは、これとアプラウトの関係にある女性名詞 Gmc *smīpō の存在からも明らかであろう。あいにく古英語には *smīpō を反映する語は例証されないが、ON smīð は ‘skilled work’ を、OHG smīda は ‘metal (to be worked on), jewelry’ を意味する。OHG smīda からは集合抽象名詞 gismīdi ‘metal, metal tool(s), jewelry’ が派生し、MHG gesmīde は ‘metal tools, weapons, armor’ のようなあらゆる種類の ‘smith’s work’ を意味し、現代ドイツ語の Geschmeide は ‘(set of) trinkets, jewels, (valuable pieces of) jewelry’ を意味する。MHG gesmīde が ‘weapons’ を意味するようになっていたのと同様に、セム語の šmd ‘to strike’ には ‘weapon

for striking or throwing' という意味もあることは興味深い事実である。従って OE *smiþ* の動詞形 *smiþian* 「鉄を打って鍛える」が *smītan* に近い意味を有しているのも自然なことなのかもしれない。

しかし Vennemann (2004: 610, 611) の指摘するように、セム諸語には 'smith' を意味する語はいくつもあるものの、その中には *šmd* にも *šmt* にも由来するものがないという事実を考慮すると、実際に *šmt* が借用によって意味的に *smiþ* となり得たのかどうかという疑問が出てくることが事実であろう。そうなると、結局 *smītan* と *smiþ* とは切り離して考えるべきなのであろうか、疑問の残るところである。

Semit *g* > Gmc *k*, Semit *p* > Gmc *f*

Semit *plg* 'to divide'、OE *folc* 'Volk, Stamm, Menge, Schar ; Heer'、E *folk* (OS, OHG *folk*, G *Volk*) < Gmc **fulka-* 'to division of an army'。

Vennemann (2000: 247) は、G *Armee* (E *army*)、G *Division* (E *division*) 「師団」がフランス語から借用されたのと同様、これと同義の Gmc **fulka-* もまた借用語、しかもセム語からの借用語と見なす。そしてこれは後述の強変化動詞 OE *plēon* (<**pleohan* < **pleh-*)、また場合によっては OE *fēolan* (<**feolhan* < **felh-*) との関係も考えられるかもしれない。そして G *Volk* と Pflug (<OHG *pfluoc*)、従って OE *folc* と *plōh* (E *plough*) もセム語根 *plg* 'to divide, to split' にさかのぼり、Gmc **fulka-* は「分ける」が原義であり、*plōh* < *plōg* (<Gmc **plōg-*) は土地を切り分ける器具だったのであり、Arab *falaḥa* '(den Boden) spalten, pflügen' 「(土地を) 割る、耕す」はその変種である *plḥ* に由来するという。さらに Mailhammer (2007: 206) によれば、その同根語としてヘブライ語には名詞 *peleg* 'district, region'、動詞 *plg* 'cleave, furrow' が存在する。なお、Arab *falaḥa* の語頭子音 *f* はアラビア語に起こった子音変化 *p* > *f* の結果である。

Gmc **plōg-* そのものに対応するセム語例は見当たらないが、セム語では CiCaC という語根形で道具や器具を表す語を派生することから、Vennemann (1998: 252) は、*plḥ* から耕す道具を表す語 **pilāḥ* が存在していた可能性もあり、これがゲルマン語派に借用されて **plōg-* となったのではないかと考える。しかし、より正確には、*plḥ* の *p* が **plōg-* のようにゲルマン語でも無変化のままであったとすれば、これはゲルマン語子音推移以後の借用であることになる一方、語末の *ḥ* が *g* となっているのはゲルマン語子音推移の中のヴェルネルの法則によるものということになり、矛盾が生じる。すなわち **plōg-* は *plḥ* ではなく *plg* の派生形 **pilāg* に由来するのではないかということになる。

また OE *flocc* (E *flock*) 「人の群れ」も *folc* と関係があり、従ってセム語起源であると Vennemann (1998: 257) は考える。

さらに *plg*、*plḥ* に由来する可能性のあるものとして Vennemann が挙げている強変化動詞語根は **pleg-*、**pleh-* 'pflegen'、**felh-* 'verbergen, begaben' 「隠す、埋める」である。**pleg-*、**pleh-* については特に Vennemann (1998: 252f.; 2006: 143; 2002c: 236f.)、Mailhammer (2007: 202ff.) がその可能性を主張している。

これらは OE *plēon* 'to put in, to dedicate, to employ' ~ *pleah* (<**pleh-* ~ **plah-*)、OS *plegan* 'to be responsible for, to vouch for'、OFris *plega* 'to be used to'、OHG *phlegan* 'to dedicate, to care, to supervise, to lead' という形で現れる。これらもまた借用語だとすれば、ゲルマン語子音推移以後の借用ということになる。

OE *plēon* は語根末子音 *g* ではなく *h* をはっきりと示唆するものである。Seebold (1970: 364) の言うように、この動詞が印欧語起源であるのなら、古英語と古高地ドイツ語における *g* 対 *h* という対立はヴェルネルの法則に起因するものとは考えにくい。たとえ印欧語起源であったとしても、なぜ古英語以外の西ゲルマン語がヴェルネルの

法則による異形を一般化しなければならなかったのが説明し難いが、*pleg-、*pleh- もセム語からの借用語であったとすれば、その点は説明がつくかもしれない。

また Vennemann (1998: 253) が指摘するように、*plōg- が強変化動詞 5 類 *pleg- と同根であるという前提に立つなら、5 類の語根において *plōg- のように長母音 ē¹ ではなく ō を有する派生語は本来ゲルマン語派では考えにくいと思われる。しかも前述のように、*pleg-、*pleh- は一見ヴェルネルの法則に起因するかのような、しかしそうとは考えにくい語根末子音の交替を示している。この 2 点がこれらは借用語であることを示唆しているようにも思われるのである。さらに *plegan のもとの意味として考えられるのが ‘to cultivate’ 「耕す、育成する、教化する、はげむ」であり、さらに cultivate のもとの意味そのものが「耕す」であったということもまた、*plōg- と *pleg-、*pleh- とのつながりを示す根拠となるかもしれない。

そして *felh- 「隠す、埋める」、強変化動詞 3 類の OE *feolan* (<*felhan) ~ *fealh* ~ *fulgon* ~ *folen* (Go *filhan* ~ *falh* ~ *fulhun* ~ *fulhans*) の場合、セム語根 *plh* がゲルマン語子音推移以前に借用され、ゲルマン祖語におけるその時点での借用形 *plk* がゲルマン語子音推移を受けたという可能性が考えられるのである。Gmc *felh- の意味する「隠す」は「分け隔てる」という行為の一種でもあり、意味的にも音韻論的にもセム語起源である可能性は否定できないであろう。

他方、それ自体は強変化動詞ではないが、同じセム語根に由来し、しかも *felh- とは一見アプラウトの関係にある派生語であるかのように見える例がある。それは Vennemann (2002c: 237-240) が挙げている E *fallow*、G *Felge* 「すきで耕した状態にある休閑地」、to *fallow* 「土地を耕して休めておく」、G *felgen* 「土地をすき返す」、OE *fealg* ‘fallow’ (名詞)、*fealgian* ‘to fallow’ である。これはセム語の動詞的形容詞 *palh- ‘ploughed up’ がゲルマン語子音推移以前に借用され、その段階では *palk- であったと思われる。そしてグリムの法則により p は f に、ヴェルネルの法則により k は g になった結果であったと考えられるのである。

Semit p > Gmc f, Semit k > Gmc h, Semit t > Gmc þ > Gmc d

Gmc *feh- ‘to rejoice’、すなわち強変化動詞 5 類の OE *-feon* ~ *-feah* ~ *-fægon* (OHG *-fehan* ~ *-fah* ~ *-fahun*)。

これについても語根末子音がヴェルネルの法則による子音交替をはっきり示していることから、借用語であることを前提とするならば、ゲルマン語子音推移以前の借用語ということになり、ゲルマン祖語での借用時には *pV_k- だったのであり、そこから Gmc *fVh-、*fVg- となったと考えられる。Vennemann (2002a: 12) によると、借用に先立つもとの語根形はセム語根 *p_{kh}- であり、ここから Arab *fakiha* ‘to be or become serene, cheerful, merry, humorous’、*fakih*, *fakih* ‘serene, cheerful, merry, humorous’、*tafkiha* ‘hilarity, enjoyment’ が生じた。

さらにこの動詞が外来語起源であることを示す根拠として考えられるのが Go *fahēps*, *fahēds* ‘joy’ の接尾辞 -ēd- であるという。そしてこの接尾辞はセム語では *āt- だったのであり、*pak-āt-V という原形は、ゲルマン祖語では IE ā > Gmc ō という音変化によって ā は失われていたため、音代用により Pre-Gmc *pak-ēt-is となり、Go *fahēps*, *fahēds* となったという。Vennemann (2002a: 13) はこの接尾辞の子音 *t- はセム語の女性名詞を表す接尾辞に由来するとしており、この接尾辞を有するセム語起源の例としてさらに Gmc *magapiz ‘girl’ (OE *mæg(e)þ*), OS *magad*, OHG *magad*, Go *magaps*, Akkad *maḥātum* ‘aunt’), Gmc *furht- ‘fear, fright’ (E *fright*, G *Furcht*, Go *faurhtei*, Akkad *puluḥtu(m)*), そして自身が前記の OE *metan*, Go *mitan* ‘to measure’ と同根であると見なす Go *mitad* ‘measure’ (Hebr *midat* ‘measure’) を挙げている。

以上のことから、Go *fahēps*, *fahēds* が接尾辞も含めてセム語起源であるという前提に立つならば、その同根語

である強変化動詞 5 類 OE *fēon* もまたセム語起源ということになるであろう。

2-2 OE *dragan* と Lat *trahere*

そして従来から問題となっているのが強変化動詞 6 類 OE *dragan* ~ *drōg* ~ *drōgon*、E *draw*、*drag*、(OS *dragan* ‘tragen’、OHG *tragan*、G *tragen*、ON *draga* ‘ziehen’、Go *dragan* ‘sich auhladen’) と Lat *trahere* ‘to pull, to drag’ との関係である。Vennemann (2002b: 437) は *draw* が OE *dragan* からの発達であるのに対し、*drag* の *g* は説明がつかないとしている。この点については、*drag* は ON *draga* を借用した発達形 ME *draggen* に由来するという見方が有力のようである。

古英語と古ノルド語ではその基本的な意味は ‘to pull, to drag’ であるの対し、他のゲルマン諸語では ‘to carry, to bear’ である。OE *dragan* と Lat *trahere* は意味的に一致し、音韻的にも語根末子音はどちらも IE *gh* を反映しているように思える。他方、語頭子音は Lat *t* であれば OE *þ* のはずであるが、実際はそうではない。すなわちこれらが印欧語起源であれば、OE *dragan* は IE **dhragh-*、Lat *trahere* は IE **tragh-* と再建できるはずであり、両者は語頭子音以外については完全に一致しているように見える。Seebold (1970) も、このように同一に近い形と同一の意味を有するこの 2 語が別々の原形に由来する可能性は非常に低いとしている。

Seebold は他に何らかの関係がある可能性のあるものとしては Gmc **trek-* ‘to pull’ があるとしている。その主な例を挙げると、OFris *treka* ‘to pull out quickly’、MDu *treken*、MLG、MDu *trecken*、Du *trekken* ‘to pull’、MHG *trehhen* ‘to pull’ がある。Seebold は、Gmc **trek-* は十中八九 Gmc **drag-* と何らかの関係があるとしている。さらに Vennemann (2002b: 438) は E *track* 「跡 (をつける)」 もまた同じ語根形に由来するのではないかと指摘している。なお、**trek-* は現代英語に *trek* という形で借用されている。これはオランダ語の変種と言えるアフリカーンス語の *trekken* を借用したものである。*trek* の意味は「(牛などが) 引く、牛舎で旅行する、徒歩の小旅行をする」であり、日本語でも「トレッキング (徒歩の小旅行)」という形で知られている。

Vennemann (2002b: 439) は、仮に E *track* が Gmc **trak-* に由来するものであり、**trak-* が Gmc **trek-* ‘to pull’ とアブラウトの関係にあったのであれば、それはさらに IE **drog-* に由来することになるのであろうが、このように語頭と語根末の両方に有声閉鎖音を有する語根構造は印欧語族には本来は存在しないという原則に従うなら、これもまた他の語族からの借用語であったにちがいないとしている。

さらに OE *dragan* の他の語派における同根語として Holthausen (1974³) が挙げているものに Latv *dragāt* ‘rūcken」 「動かす、移動する」、Russ *doróga* ‘Angel, Weg, Reise」 「釣りざお、道、旅」がある。そして Pokorny (1959: 257) が挙げている例の中でも、Vennemann (2002b: 438) が指摘するように、興味深い意味の特殊化を示すものとして Serb-OCS *draga* ‘valley」 「谷」がある。そしてゲルマン語派にも ‘Angelschnur」 「釣り糸」を表す、しかも強変化動詞の変化表の枠外でゼロ階梯を示す Norw *dorg* (<Gmc **durgō*) がある。

他方、ゲルマン語派において母音はともかくとして、子音の点では Lat *trahere* と同根語であると見なせそうな例として OE *þrægan* ‘laufen」 「走る」、Go *þragjan* ‘laufen’、OE *þræg* ‘Zeit’ < ‘Zeitlauf」 がある。OE *ā*、*æ* は Gmc *ai* ととも一致するが、古英語形がゴート語形と同根である以上、しかも印欧語起源であることを前提とするならば、アブラウトによる Gmc *ē*¹ (<IE *ē*) の反映と見なすほかはないであろう。すなわち OE *þrægan* は Gmc **prē¹gjan-* に由来し、OE *þræg* は POE **prægu* の段階で語根母音 *æ* が次音節の *u* の影響で *ā* となり、重語根後位置の *u* が消失した結果であろう。

Go *þragjan*、OE *þrægan*、OE *þræg* は、子音に関しては確かに Lat *trahere* との対応は示してはいるものの、

母音についてはもちろん意味的にもむしろ Gk trékhō ‘I run’ との関係が考えらる。すなわちアプラウトの関係にある IE *tregh-, *trogh-, *trēgh- を反映するものであり、Lat trahere とは無関係であるようにも思える。他方、Gk trékhō は IE *dhregh- > PGk *threkh- > (グラスマンの法則) Gk trékhō という音過程の結果であるとも考えられるのである。すなわち OE dragan は Gk trékhō と同根なのであり、これとアプラウトの関係にある IE *dhrogh- を反映しているという見方もできるかもしれない。しかし Vennemann (2002b: 439) は、OE dragan と Lat trahere はあくまでも同根語であり、子音対応が印欧語族の音韻法則に反しているのは、それらが外来語であったからだと主張している。

Vennemann (2002b: 439, 440) は、その借用語のもとになっているのがセム語族であったとしており、彼の挙げているセム語の例の中で特に注目したいのが Akkad tarqu, daraggu ‘Weg(spur), track’ である。すなわち Akkad tarqu, daraggu も E track も何か引きずられたものによって地面にできた線や印、そしてそこからさらに人や動物の足で生じた印や小道という意味がある。従って daraggu がゲルマン語子音推移後に借用されて Gmc *drag- > OE dragan となったという見方もできるであろう。他方、Gmc *trek-, *trak- は daraggu がゲルマン語子音推に先立って借用された結果とも解釈できるであろうし、tarqu がゲルマン語子音推移後に借用された結果とも見なせるであろう。そして Lat trahere に近いのは tarqu であり、Vennemann (2006: 143) によると、ゲルマン語子音推移前に借用されたと思われるセム語の q は IE gh の反映と融合したものと解釈できる。その例証となり得るものとして Vennemann は ON garðr ‘fence, enclosed area, garden, farm’ とセム語の qrt ‘city’ を挙げている。これはもちろん OE gearð (OS gard, OHG gart, Go gards), Lat hortus ‘garden’ と同根語であり、借用時のセム語の q がラテン語においてもまた IE gh の反映と融合していたことを示唆するものであろう。そうであれば、Lat trahere も前記の OE þrægan ‘laufen’, Go þragjan ‘laufen’, OE þræg も tarqu に由来する可能性は十分考えられることになる。

最後に Vennemann (2002b) は興味深い示唆に富んだ指摘でこの項目を締めくくっている。

Vennemann がさらに同根語である可能性のあるものとして挙げているのが OE þerh (Go þairh), þurh (E through, thorough, G durch) < Gmc *þerh-, Gmc *þurh- (< *tṛk-) である。確かに ‘through’ を意味する前置詞と ‘way’ を意味する語 (track) とは語源関係があったとしても不思議なことではないかもしれない。このことを裏付ける例として彼は、現代ヘブライ語の drk が ‘through, by’ を意味する前置詞であると同時に聖書ヘブライ語と同じく現代でも ‘way, road, manner’ を意味する名詞でもあり、またドイツ語の前置詞 wegen ‘because of’ は ‘way’ を意味する Weg と同根であるという事実を挙げている。また ‘servant’ を意味する ON þráll (> LOE þræl, E thrall), OHG drigil と Go þragjan ‘laufen’ 「走る」もまた互いに意味的にも結びつくセム語起源のものであるとしており、Vries (1962²: 625) は ON þráll, OHG drigil については *prahil, *pregil という形を推定している。そして LOE þræl, E thrall と OE þrægan ‘laufen’ との関係についても同じことが言えるかもしれない。結局 ‘servant’ とは輸送のために使う車を引いて走るという仕事する人であったのかかもしれない。

すなわち、セム語の3子音語根 C₁ C₂ C₃ から成る語において C₃ は変わりやすく、しかしそれでいてとても意味の近い語根集団を形成することがよくあることから、結局セム語からゲルマン語派へと借用されるその出発点となったのは、語根構造 TrC (T = t, d, またCはさまざまな子音、特に軟口蓋破裂音) に基づく語群であったというのが Vennemann の見方である。

逆に、OE dragan と Lat trahere をあくまでも印欧語族本来の語として導き出そうとしたのが Mottausch (1993) であった。

Mottausch (1993: 163, 164) はまずその出発点となる最古の形として athematic な動詞形 IE *trégh-mi (1 人称単数)/*trgh-mé (1 人称複数) を前提としている。すなわち Lat trahere と OE þrægan, OE þræg, Go þragian とは音韻法則的に完全に一致する印欧語族本来の語であるという。ただし ON þráll (>LOE þræl, E thrall), OHG drigil については、これらを印欧語族として見れば、特に ON þráll のもとの形が Vries の考える *brahil であったとすれば、語根末子音は IE gh ではなく k ということになってしまうという点で Lat trahere とは一致しない。

Mottausch (197f.) は結局 Gmc *drag- の特に語根母音 a については、イタリック語派からの影響ではないかとしている。

まずゲルマン語派本来の発達として Mottausch (170) はゼロ階梯の IE *trgh- を出発点として考え、このように語頭の無声閉鎖音 t と語根末の有声帯気音 gh との間に成節的な r である ʀ を挟む場合、ゲルマン語子音推移に先立って遠隔同化 (Fernassimilation) により、t は通常の þ ではなく dh となったと考える。そしてこの音変化を証明する例がまさに ON dorg ‘Angelschnur’ (<Gmc *durgō<Pre-Gmc *dhrghā<IE *trghā) であるという。この結果、ゲルマン語派では IE *tregh-/ *trgh- はまず *tregh-/ *dhrgh- となり、これがさらにイタリック語派本来の発達形である (*tregh-/ *trgh- >) *tregh-/ *tragh- > *tregh-/ *tragh- の影響で *tregh-/ *dhragh- となったという。この点について Mottausch は、ラテン語では IE ʀ が例えば Lat cor ‘heart’ (<*cord), 属格単数 cordis<IE *kʷrd- (Gk kardía) におけるような本来の発達である or ではなく、Lat fractus ‘broken’, fragilis ‘fragile’ (OE breccan ‘to break’ <IE *bhregh-), gradior ‘step’ (Go grips ‘step’ <IE *ghredh-) のように二次的に *rə を経て ra となっていることがよくあるという Kurylowicz (1968: 245f.) の指摘をその根拠としている。結局、イタリック語派では現在時制におけるこの re ~ ra という交替は放棄され、ra に一般化された結果が Lat trahere だったのであり、さらにゲルマン語派では re ~ ra に加え t ~ dh という語頭子音の交替も伴った *tregh-/ *dhragh- であったため、この複雑な交替は放棄されて *dhragh- が一般化され、ここから Gmc *drag-、そして OE dragan が誕生したのだという。

3. 強変化動詞の関連語におけるアブラウトとそれに付随する子音変化: ti- 抽象名詞を中心に

アブラウトの反映は強変化動詞の変化表に限定されたものではなく、その枠外の同根語においても確認できる。その中の 1 つとして本稿で注目してみたいのが ti- 抽象名詞 (ti-Abstrakta) と呼ばれるものである。元来これはゼロ階梯の語根に接尾辞 IE *-ti- が付加されて形成されるものであり、主として女性名詞であった。そしてさらにこの形成法による動作名詞、動作主名詞も見られる。

しかしのちに ti- 抽象名詞はゼロ階梯の語根というよりも同じく本来ゼロ階梯であった過去分詞の語根をベースにするものと解釈し直された。そして特に強変化動詞 5 類において語形変化の上で逸脱したような形態を回避するための手段として過去分詞の語根構造がゼロ階梯の *CC- から弱変化階梯 *C_cC- を経て完全階梯 *CeC- へと改変されたことや強変化動詞 6 類、7 類の成立といった状況の変化により、ti- 抽象名詞はむしろ強変化動詞において本来のゼロ階梯から必ずしもそうではなくなってしまう母音度の過去分詞に基づいて形成されるようになっていったと考えられる。

こうした状況も踏まえ、主に Seebold (1970)、Bammesberger (1990)、Casaretto (2004a, 2004b) で挙げられている ti- 抽象名詞の実例を通して、過去現在動詞も含め強変化動詞の変化表の枠外におけるアブラウトの状況と ti- 接辞の付加に伴う子音変化も合わせて見ていくことにしたい。

(1) æht ‘Geschlecht, Familie, Himmelgegend, Windrichtung’ <*aih-ti- (Go aihts)。1 類の語根構造を有する過

去現在動詞 āgan ‘to possess’ (Go aigan) と同根。過去分詞は同一階梯の āgen, ægen (<*aigan, *aigin)。他の語派で本来のゼロ階梯に由来する ti- 抽象名詞 Av išti- ‘Gut, Reichtum’ と同根。

(2) ærist ‘Erhebung, Auferstehung’ <*ris-ti- (Go urrists ‘Auferstehung’)。1 類の rīsan ‘to rise’ (Go reisan) と同根。過去分詞 risen と同じ本来のゼロ階梯。

(3) āpswierd ‘Schwur’ <*swar-di- (OHG eidswart)。6 類の swerian ‘to swear’ <*swarjan (OS swerian, Go swaran) と同根。過去分詞は同一階梯の swaren。ただしこの 6 類本来の過去分詞 swaren はまれであり、4 類型のゼロ階梯の sworn の方が一般的である。また Seebold, Bammesberger (1990: 178) によれば、ti- 抽象名詞ではないが、sworn と同じゼロ階梯のに基づく mānswora ‘Meineidiger’ (<Gmc *swur-ōn-) という実例もある。

(4) cyst ‘Wahl, Güte, Vorzug’ <*kus-ti- (Go gakusts ‘Probe’)。2 類の cēosan ‘to choose’ (Go kiusan) と同根。過去分詞 coren <Gmc *kuzanaz (Go kusans) と同じ本来のゼロ階梯。他の語派でゼロ階梯に由来する本来の ti- 抽象名詞 Skt juṣti- ‘Gunst’ と同根。

(5) dryht ‘Gefolgschaft, Armee, Volk’ <*druh-ti- (Go gadrauhts ‘Soldat’)。2 類の drēogan ‘Gefolgschaft leisten’ (Go driugan) と同根。過去分詞 drogen <Gmc *druganaz と同じ本来のゼロ階梯。

(6) ēst ‘Gunst’ <*an-s-ti- (OS, OHG anst, Go ansts)。3 類の語根構造を有する過去現在動詞 an ‘ist gewogen’ (OHG an, ON ann) <IE *X₃enX₂- と同根。過去分詞はゼロ階梯 unnen であり、しかも他のゲルマン語で OHG unst のような本来のゼロ階梯が存在するにもかかわらず、語根母音 a を有する形の存在は異色である。語根と *-ti- との間に存在する s について、Casaretto (2004b: 497) は OS kunst, kūst, OHG kunst ‘Kenntnis, Wissen’ (OE cunnan, OS, OHG kunnan ‘can, know’) のように西ゲルマン語によく見られる s- 挿入によるものと考ええる。

(7) fierd ‘Fahrt’ <*far-di- (OS fard, OHG fart, farth)。6 類の faran ‘to go’ (OS, OHG, Go faran) <IE *por- と同根。過去分詞 faren と同一階梯。

(8) flyht ‘Flucht, Flug’ <*fluh-ti-。‘Flucht’ を意味する場合は 2 類の flēon ‘to flee’ <*flēohan (OS, OHG fliohan, G fliehen) と、また ‘Flug’ を意味する場合は 2 類の flēogan ‘to fly’ (OS, OHG fliogan, G fliegen) と同根であり、どちらも過去分詞 flogen <Gmc *fluganaz と同じ本来のゼロ階梯 (flēon も flēogan も過去分詞は flogen)。

(9) gebyrd ‘Geburt’ <*bur-di- <IE *bhr̥-ti- (OS giburd, OHG giburt, Go gabaurþ)。4 類の beran ‘to bear’ (Go bairan) と同根。過去分詞 boren <Gmc *buranaz (Go baurans) と同じ本来のゼロ階梯。他の語派でゼロ階梯に由来する本来の ti- 抽象名詞 Skt bhr̥ti- ‘Hervorbringen, Unterhalt’ と同根。

(10) geclyft ‘Spalt’ <*kluf-ti- (OHG cluft)。2 類の clēofan ‘spalten’ (OHG klioban) と同根。過去分詞 clofen <Gmc *klubanaz と同じ本来のゼロ階梯。

(11) gecwiss ‘conspiracy’ <*k^wessi- <IE *g^wet-ti- (Go gaqiss ‘consenting’)。5 類の cweþan ‘to say’ (Go qīpan) と同根。過去分詞 cweden (Go qīpans) と同じ完全階梯。

(12) gemynd ‘Erinnerung, Denken’ <*mun-di- <IE *m̥n̥-ti- (OHG gimunt, ON mynd, Go gamunds)。4 類の語根構造を有する過去現在動詞で直説法現在 1、3 人称単数 man ‘remember’ (Go man) と同根。過去分詞 gemunen と同じ本来のゼロ階梯。他の語派でゼロ階梯に由来する本来の ti- 抽象名詞 Skt mati- ‘Gedanke, Absicht’、Lith mintis ‘thought’ と同根。

(13) genyht ‘Überfluß’ <*nuh-ti- (OHG ginuht)。5 類の語根構造を有する過去現在動詞 -neah ~ -nugon ‘be enough’ ~ -nohton (OHG -nah, Go -nah, -nauhts) と同根。過去分詞の実証形はないが、-nugon (現在複数) ~ -nohton (過去複数) と同じ語根母音の Gmc u を有する形であったと考えられる。この動詞は IE *Xnek- に由来するとさ

れる。すなわち現在複数も過去複数も過去分詞も本来ゼロ階梯を反映しているはずなので、現在複数には *-nugon* ではなく IE **X_{nk}-* > Gmc **ung-* > OE **-ungon*、そして過去複数には *-nohton* ではなく IE **X_{nk}-* > Gmc **unh-* > OE **-ūhton* となってしまうのが本来の発達であったはずである。すなわち ‘Überfluß’ を意味する *ti-* 抽象名詞についても、*genyht* ではなく **unh-ti* > **ūh-ti* > **y_h-ti* > **geyht* となってしまうところであろう。しかしこれらは *-neah* の変化形あるいは関連語としては受け入れ難い逸脱した形であるため、また恐らく *man*、*munon* ‘remember’、*þearf*、*þurfon* ‘need’、*þorfte* (過去単数) のような他の過去現在動詞の影響もあり、**-nuh-*、**-nug-* という本来のアプラウトには由来しない語形に改変されたものと考えられる。

さらにこの動詞には変化表の枠外で延長階梯を示す *genōh* ‘enough’ (OS *ginōg*、OHG *ginuog*、G *genug*、Go *ganōh*) がある点にも注目したい。

(14) *gift* ‘(Hochzeits) Gabe’ < **gef-ti-*。5 類の *giefan* ‘to give’ (OHG *geban*、Go *giban*) と同根。過去分詞 *giefen* (OHG *gigeban*、Go *gibans*) と同じ完全階梯。

(15) *hæs* ‘Geheiß’。7 類の *hātan* ‘heißen’ (Go *haitan*) と同根。*hæs* の語末の *s* は、*hātan* の語根末の *-t* がまだ IE *-d* であった段階でそこへ **-ti-* が付加されて生じた子音結合 **-d-ti-* が **-ssi-* となり、*ss* が *s* に短縮されるという音変化の結果である。もちろん過去分詞は同一階梯の *hāten*。

(16) *hancræd* ‘Hahnenkrähen’ < **krē¹-di-* (OS *hanocrād*、OHG *hanacrāt*)。7 類の *crāwan* ‘to crow’ (< **krāewan* < Gmc **krē¹-an-*) と同根。*crāwan* に過去分詞の実証形はないようであるが、7 類では過去分詞は現在形と同一階梯。

(17) *hwyrft* ‘turning, circuit’ < **hwurf-ti-* (OHG *umbiwurft* ‘Erdkreis’)。3 類の *hweorfan* ‘to turn, to go’ (OS *hwerban*、OHG *werban*、Go *hwaiban*) と同根。過去分詞 *hworfen* < Gmc **hwurbanaz* と同じ本来のゼロ階梯。

(18) *ield* ‘(Zeit) Alter’ < **al-di-* (Go *alds* ‘(Menschen)Alter’)。6 類の *alan* ‘nähren’ (Go *alan*、Lat *alere*) < IE **X₂el-* と同根。なお、過去分詞の実証形は ON *alinn* のみ。

(19) *mæþ* ‘mowing’ < **mē¹-þi-* (OHG *amāt* ‘second mowing’) < IE **X₂meX₁-ti-* (Gk *amáo* ‘schneide, mähe, ernte’)。7 類の *māwan* ‘to mow’ (< **māewan* < Gmc **mē¹-an-*) と同根。過去分詞 *māwen* と同一階梯。

(20) *pliht* ‘Gefahr’、E *plight* ‘Pfand’ < **pleh-ti-* (OHG *pfliht* ‘Fürsorge, Pflege, Gebot’、G *Pflicht*)。前述の 5 類の *plēon* ‘to put in, to dedicate, to employ’ < **pleohan* < **plehan* (OS *plegan*、OHG *phlegan* < **plegan*) と同根。過去分詞 **plegen* (OHG *giphlegan*) と同一階梯。

前述のように、**pleg-*、**pleh-* はセム語からの借用語であるというのが Vennemann の主張であるが、さらに Vennemann (1998: 253f.) は G *Pflicht* の *-t* も *Furcht* の *-t* と同様 (従って E *plight* の *-t* も E *fright* の *-t* と同様) セム語起源の可能性があるとまで主張している。

(21) *scyld* ‘debt’ < **skul-di-* (OS、OHG *sculd*)。4 類の語根構造を有する過去現在動詞で直説法現在 1、3 人称単数 *sceal* ‘shall’ (Go *skal*) と同根であり、本来のゼロ階梯。

(22) *seht* ‘Vertrag, Übereinkunft, Frieden’ < **sah-ti-* (Go *gasahts* ‘Vorwurf’)。6 類の *sacan* ‘rechten’ (Go *sakan*) と同根。過去分詞 *sacen* と同一階梯。

(23) *sihp* ‘Gesicht’ < **seh^w-* (OHG *gisiht*)。5 類の *sēon* ‘to see’ (OS、OHG *sehan*、Go *saihan*) と同根。過去分詞 *sewen*、*segen* と同じ完全階梯。

(24) *sliht*、*slyht* ‘Schlag, Kampf, Tötung’ < **slah-ti-*、**sluh-ti-* (Go *slauhts* ‘Schlachten’ < Gmc **sluh-ti-*)。6 類の *slēan* ‘to slay’ < **sleahan* (Go *slahan*) と同根。*sliht* は現在時制そして過去分詞 *slagen* と同一階梯である一

方、slyht はウェストサクソン方言の $ie > y$ という後期の音変化の結果なのか、あるいはまさに Go slauhts のように動詞の変化表の枠内のアプラウトに取り込まれることなく、 $ti-$ 抽象名詞本来のゼロ階梯 $*sl_1- > *sul-$ が現在形に依拠した形への音位転換によって $*sulhtiz > *sluhtiz > OE slyht$ となった結果なのか、はっきりしない。

(25) spēd ‘success’ $< *spō-di-$ (OS spōd)。7 類の spōwan ‘to succeed’ $< Gmc *spōan-$ と同根。

(26) stede ‘place’ $< *sta-di-$ (OS stedi, ON staðr, Go staps) $< IE *stX_2-ti-$ (Gk stásis, Skt sthiti-)。Gk histēmi, hístāmi ‘stelle’ $< *stā-$ $< IE *steX_2-$ と同根。6 類の standan ‘to stand’ (OS standan, ON standa, Go standan)、そしてその過去分詞 standen (OS standen, ON staðinn) と同じ本来のゼロ階梯。

(27) tiht ‘Bezeichnung, Anklage’ $< *tih-ti-$ 。1 類の tion ‘zeihen, anklagen’ (OHG zihan, Go gateihan) $< IE *deik-$ (Lat dicō ‘sage’, Gk deiknumi ‘zeige’, Skt diśati ‘zeigt’, Skt diṣti- ‘Anweisung’)。過去分詞 tigen と同じ本来のゼロ階梯。

(28) tyht ‘Zug, Erziehung, Zucht’ $< *tuh-ti-$ (OHG zuht ‘Zucht, Erziehung, Sprößling’)。2 類の tēon ‘to draw’ $< *tēohan$ (OHG ziohan, Go tiuhan) と同根。過去分詞 togen $< Gmc *tuganaz$ と同じ本来のゼロ階梯。

(29) wift ‘Einschlag’ $< *wef-ti-$ (MHG wift ‘Faden, Zwirn, Wabe’)。5 類の wefan ‘weben’ (OHG weban) と同根。過去分詞 wafen $< Gmc *webanaz$ と同じ完全階梯。

(30) wist ‘guter Zustand, Glück, Fülle’ $< *wes-ti-$ (OHG wist ‘Wesen, Ding’, Go wists ‘Wesen, Natur’)。5 類の wesan ‘sein, bleiben’ (OS, OHG wesan, Go wisan) と同根。過去分詞 weran $< Gmc *wezanaz$ (OHG weran, OFris wesen) と同じ完全階梯。

以上、古英語の $ti-$ 抽象名詞の実例を見てきたが、 $ti-$ 抽象名詞を形成する接尾辞 $IE *ti-$ は古英語では $-t$ 、ヴェルネルの法則を反映する $-d$ 、そしてまれに $-p$ という現れ方をするほか、動詞の語根末子音 $IE -d, -t$ に $*ti-$ が付加された場合、 $IE *d-ti-, *t-ti-$ はどちらもまず $Gmc *ssi-$ となり、 $*ti-$ が付加された動詞が軽語根の場合には ss は (11) gecwiss のようにそのままであったが、重語根の場合には (15) hæ̆s のように s に短縮された。また $-t$ という現れ方は、 $*ti-$ が付加された動詞の語根末子音が $OE c, f, g, h, s$ であったケース ((23) sihp を除く) と、(6) ēst ($< *an-s-ti-$) のように $*ti-$ が付加される際に語根後位置に二次的な s が挿入によると思われる s を有するケースであったのに対し、 $-d$ という現れ方は、 $*ti-$ が付加された動詞の語根末子音が l, n, r であったケースと、その動詞の語根母音に後続する子音がもともとなかった (16) hancræd、(25) spēd のようなケースであった。

$ti-$ 抽象名詞は $i-$ 語幹名詞でもあり、これは proterokinetic なタイプの変化をする。(12) gemynd を例にとると、それはもともと $IE *mén-ti-s$ (主格単数) のような強格と、 $IE *m̥n̥-téi-s$ (属格単数) のような弱格から成っていたと考えられる。すなわち gemynd はその変化表に元来 $Gmc *menp-$ と $*mund-$ という二重形を有していたことになり、古英語を含むゲルマン語派では後者 $*mund-$ に基づく $*mundi-$ が一般化されと考えられる。これに対し、前者 $*menp-$ からは Go gaminpi, ON minni ‘Gedächtnis’ $< *menpija-$ が形成され、さらに $*menp-$ と $*mund-$ との混交によると思われる Go anaminds ‘Meinung, Vermutung’ のような例もある。

理論的には (19) mæp は強格の $IE *X_2méX_1-ti-$ に直接由来する $Gmc *mē'piz$ の反映であるのと考えられるに対し、OHG amāt $< Gmc *mē'diz$ の場合、語根母音は強格に由来し、ヴェルネルの法則を反映する語末子音 $-t$ は弱格 ($*X_2mX_1-téi-s$) に由来する、混交による形と見なすことが可能であろう。ただし sihp (OHG gisih) の $-p$ は音韻法則に反するものであり、説明が難しい。

純粹に印欧祖語の弱形に直接由来すると見なせるのは、他の語派に意味の上でも正確に一致する同族語を広く持

つ *gemynd* のようなケースに限られると Casaretto は主張する。しかし *ti*-抽象名詞には本来は確かに強格と弱格の形が存在し、またゲルマン祖語ではそれに伴う交替 (**ti*- >) **þi*- ~ **di*- も広く起こっていたと考えられる。そしてのちにゲルマン語派では過去分詞の語根であれば、もはやゼロ階梯という本来の条件なしに接尾辞 **þi*- と **di*- が無差別に付加されるような語形成がなされていったのではないだろうか。古英語では **di*- が優勢であったが、西ゲルマン語では例えば (7) *fierd* に対し OHG *fart* (<**far-di*-)、*farth* (<**far-þi*-) のような、そして (21) *scyld* に対しヴェルネルの法則とはあくまでも無関係で *p* > *d* という第二次子音推移の結果に他ならない *d* を有する OHG *sculd* というような揺れも見られる。

他方、こうした状況の変化にもかかわらず、6 類と同根の *ti*-抽象名詞の中には強変化動詞のアブラウトには左右されず純粋にセロ階梯から形成された状態を保持していると考えられる実例がある。古英語にはそのような確たる実例は見られないが、それは *faran* と同根の Go *gafaurds* ‘Versammlung, hoher Rat’ <**fur-di*-、そして前記の Go *slauhts* である。OE *fierd*、OS *fard*、OHG *fart*、*farth* のよう例は *faran* と同根であることが形態上も意味上も明快であったと思われるのに対し、Go *gafaurds* の場合はそのような関係性はもはや認識されなくなっていたと考えられるのであり、その結果このような孤立した、しかしだからこそ本来の形態のままで残ったのであろう。また前述のように (24) *sliht* と並ぶ *slyht* についても、これが Gmc **slah-ti*- > *sliht* からの発達形ではなく、Go *slauhts* と同じゼロ階梯に由来する Gmc **sluh-ti*- からの発達である可能性も否定できないであろう。

faran と同根の名詞としてさらに注目すべきものにゼロ階梯の OE *ford* ‘Furt’ (OHG *furt*) と *e*-階梯の ON *fiḡrðr* ‘Meerbusen’ がある。どちらも *ti*-抽象名詞ではないが、Lat *portus* ‘Hafen’、Av *pəṛətu*- ‘Durchgang, Furt’ と同根であり、前者は Gmc **fur-du*-、後者は Gmc **fer-þu*- に由来する。*ford* は *u*-語幹名詞であるにもかかわらず、語根母音が *u* ではなく *a*-ウムラウトによる *o* となっているのは、語根に Gmc -*au* (>OE -*a*) が後続する単数の属格、与格からの影響か、あるいは古英語において -*a* を有するようになった複数の主格、対格、属格のような *a*-ウムラウトを引き起こしたと考えられる形からの影響であろう。

また前記の *gemynd* と同様 (9) *gebyrd* についても、理論的には主格単数 IE **bhér-ti-s* のような強格と属格単数 IE **bhṛ-téi-s* のような弱格がもともと存在していたと考えられる。そして前者からは Gmc **-berþ* が、後者からは Gmc **-burd*- が生じていたはずであるが、後者の弱格に由来する形が一般化され、**þi*- ~ **di*- の交替についても西ゲルマン語では **di*- が一般化された結果、主格単数が **-burdi*- となり、さらに OE *gebyrd* となったのではないだろうか。逆にもし主格単数 IE **bhér-ti-s* から直接の発達したものであれば、Gmc **-berþiz* > OE **gebirþi* > **gebiorþi* > **gebierþ* となっていたであろう。

同様のことは *scyld* についても言えるのであろう。しかしこれは強格に由来する形 Gmc **skelþ*- と弱格に由来する形 Gmc **skuld*- との混交により生じていたと思われる主格単数の Gmc **skuldiz* と **skulþiz* のうち、通常考えられる前者からではなく後者からの発達であった可能性も否定できないのではないだろうか。なぜならば、語中の Gmc -*lþ*- は西ゲルマン語では -*ld*- となるからである (OE *wilde*、OS *wildi*、Go *wilþeis* ‘wild’)。すなわち *scyld* の -*d* はヴェルネルの法則を反映する古い -*d* ではなく、この -*lþ*- > -*ld*- という変化に由来するものかもしれない。すなわち Gmc **skulþiz* > WGmc **skuldi* > OE *scyld* という音過程の結果であったという見方もできるかもしれない。

他方、OHG *sculd* の -*ld* は、この -*lþ*- > -*ld*- の変化に先立って **skulþiz* の -*iz*- が消失した後に -*lþ* が第二次子音推移を受けた結果に他ならないのではないだろうか。もし古高地ドイツ語形が古英語と同じく Gmc **skuldiz* に由来するものであれば、第二次子音推移により *scult* となっていたはずであり、現にこの形も実在した。

4. 強変化動詞7類について：過去母音の成立過程を中心に

4-1 e-挿入説

強変化動詞7類の過去母音の形成は、古英語の場合、印欧祖語におけるアプラウトに直接さかのぼって理解することは不可能であり、その過去母音 *ē*、*eo* は一見アプラウトに由来するかのように見えて、実はそうではないことは間違いないところである。そしてこの *ē*、*eo* については、もとの重複接頭辞の母音 *e* と語根母音が縮合した結果であるとする見方がこれまでのところ有力なようである。例えば *hātan* ‘to command’ < **hāitan* (Go *haitan*) の場合、主に Voyles (1980)、Fulk (1987)、d’Alquen (1997) 等の主張によれば、そのもとの過去形 **hehāit* (Go *haihait*) > **hegāit* において強勢が第1音節の重複接頭辞に移動して **hégait* となったことにより、この重複音節の母音 *é* が過去を表す標識として一層目立つようになり、さらにそれが語根として解釈されるようになった結果、過去母音は重複によってではなく弱化したもとの語根母音の前にこの *é* を挿入することによって形成されることになったという (**hait*→**héait*→OE *hēt*)。すなわち重複音節の母音 *é* ともとの語根母音 *ai* の弱化音との縮合による結果音 *ē* を持つ過去形 *hēt* が生まれたという。なお、*hātan* には *hēt* のほか、もとの重複形のなごりをとどめる *heht* という形も見られる。

同様のことは *lāetan* ‘to let’ ~ *lēt*、*leort*; *bēatan* ‘to beat’ ~ *bēot*、*beoftun*; *rāedan* ‘to advise’ ~ *rēd*、*reord*; *drāedan* ‘to advise’ ~ *drēd*、*dreord*; *blāwan* ‘to blow’ ~ *blēow*、*blefla*; *lācan* ‘to play’ ~ *lēc*、*leolc* についても当てはまる。

この過去母音 *ē*、*eo* の形成過程についてのこうした見方に異議を唱えているのが Jasanoff (2007)、そして Shimozaki (2012) である。以下、両者の理論を中心に論じていくこととしたい。

4-2 Jasanoff の理論を中心に

Jasanoff (2007: 262f.) は、重複過去形において強勢が語根から第1音節である重複音節に移動したことが重複音節と語根音節との縮合につながったとする前述のような見方には否定的である。その理由として、語頭強勢の確立そのものがゲルマン祖語における発達であった以上、ゴート語の重複音節の母音 *ai* は無強勢ではなく、すでに強勢があったはずであり、しかもそれでいてゴート語はゲルマン祖語の重複音節をそのまま維持していることから、強勢が重複音節にあったことが古英語を含め北・西ゲルマン語における母音縮合の決定要因であったとは考えにくいとしている。

Jasanoff (2007: 264f.) によると、重複の痕跡を残す *reord* は **rerōd* (Go *rairōd*) の複数形であるゼロ階梯 **rerdun* (<IE **rerX₁dh-*) に、*leort* は **lelōt* (Go *lailōt*) の複数形であるゼロ階梯 **leltun* (<IE **lelX₁d-*) に由来し、さらにこれに基づき *heht*、*beoftun*、*dreord*、*leolc* という形が生まれたという。すなわち単数 **rerōd*、**lelōt* : 複数 **rerdun*、**leltun* :: 単数 **hegait*、**bebaut*、**drerōd* (<**dredrōd*)、**lelaik* : 複数 X、結果として X = (**heg(a)itun*>) **hehtun*、(**beb(a)utun*>) **beftun*、**drerdun*、(**lel(a)ikun*>) **lelkun*、そしてこれらが *hehton*、*beoftun*、*dreordon*、*leolcon* となり、さらにこのプロセスは単数にも拡大されたため *heht*、*dreord*、*leolc* が生じたという。Jasanoff はこのプロセスを *compression* (圧縮) と呼んでいる。なお、**drerōd* (<**dredrōd*) における語中の *dr*>*r* という音変化は Jasanoff 自身の提案による *new cluster rule* という音韻規則が働いた結果であるという。

他方、重複音節の痕跡も失われ、現在形とアプラウトの関係にあるかのように見える *ē*、*eo* を有する過去形についても Jasanoff は新たなプロセスを提案している。

Jasanoff (2007: 268) は、寄り合い所帯のようにいくつかの語根構造から成る7類の中でも古英語はもちろん北・

西ゲルマン語全体から見て過去形に重複音節の痕跡がまったく見られないグループは、その語根構造が Gmc a + 流音または鼻音 + 子音 (healdan ‘to hold’ <*haldan; feallan ‘to fall’ <*fallan; fōn ‘to take’ <*fanhan; gangan ‘to go’) のグループであり、しかもこのグループが7類の中で最も一般的である点に注目し、重複を持たなくなった7類の過去形全体の出発点はこのグループにあったとしている。

そのプロセスを Jasanoff (2007: 268-270) は次のように説明している。彼はまず *haldan を例に取り、そのゲルマン祖語の最古の過去形は単数が *hegald (<*hehald)、複数が *heguldun (<*hehuldun) あるいはアブラウトを伴わなかった *hegaldun であったと考える。*heguldun はまず圧縮により、*heg(a)itun が hehton に、*beb(a)utun が *beftun を経て beoftun となったのと同様、*hegldun となっていたであろう。しかしこうした語中の子音群をかかえたままの形は容認不可能であったと思われるのであり、重複音節の姿の明瞭さは犠牲にしたものの語根子音の骨格を維持した形で子音群が短縮された結果 *heldun という形となった。すなわち *haldan の過去形は単数 *hegald: 複数 *heldun となった。単数 *hegald は *hegait と同じタイプの重複動詞であると分析されたであろうが、複数 *heldun は圧縮された重複形というよりも現在形 *haldan の新しいアブラウト変異形のように見えたのではないか。従って単数は重複形で、しかも語根の初音が h ではなくヴェルネルの法則による有声音 g であるというこの変則的な交替 *hegald : *heldun を維持するよりも、むしろ過去の単数と複数の語根が同一である6類の影響もあり、*hegald は *held に取って代われ、*haldan の過去形は子音も母音も交替なしの *held : *heldun となった。そしてこの形式が Gmc ai, au を語根母音とする *haitan (>hātan)、*hlaupan (>hlēapan ‘to leap’)にも広まり、その過去形として *heit : *heitun (>hēt : hēton)、*hleup : *hleupun (>hlēop : hlēopon) が生まれたのだという。同じことは *hauwan (>hēawan ‘to hew’) の過去形 *heuw : *heuwun (>hēow : hēowon) にも理論的に当てはまるであろう。

確かに OS held、OFris held、ON helt は Jasanoff の考える *held の反映に見えるが、ēo を有する OE hēold についてはこれでは説明がつかない点がまず問題である。

また Jasanoff によれば、こうした短音 e を有する非重複形の生起は *fallan ‘to fall’ のような同様の語根構造を持つ他の動詞にも起こったという。しかし *fallan ‘to fall’ を例にとると、実際に短音 e を有するのは ON fell のみであり、古英語では fēoll となっている。

同様のことはさらに語根構造が Gmc a + 鼻音 + 子音の動詞 bannan ‘to summon’ ~ bēonn (OFris banna ~ ben); spannan ‘to span’ ~ spēonn (OHG spannan ~ spian); gangan ~ gēong (OS gangan ~ geng, gieng, OHG gangan ~ giang, geng) にも見られる。

そして *fanhan の場合、確かに ON fekk, fengu はもっぱら短音 e を示すが、古英語では fēng, feng, fēngon, fengon のような長短の両形があり、また同様のことは古サクソン語と古高地ドイツ語にも言える (OS feng, fieng; OHG fiang, feng)。

このように Jasanoff の理論どおりの短音 e だけでなく長音を有する形も存在している原因については Jasanoff 自身も明確な説明ができていないようである。

前述のように、*haldan ~ *held のパターンが Gmc ai, au を有するタイプにも及び、*haitan ~ *heit、*hlaupan ~ *hleup のパターンが生まれたということになるが、ここで注目すべきは Jasanoff (273f.) の提案する NWGmc ei > ē² > OE ē という音過程である。IE ei であれば例外なく Gmc ī となったのとは異なり、彼はこのように二次的に生じた *heit の ei は ī ではなく ē² となったという前提に立っている。

さらに Jasanoff (275) は、語根母音に (IE ē > Gmc ē¹ > NWGmc ā >) OE æ を有する lāetan, slāpan ‘to sleep’ の同じく ē を有する過去形 lēt, slēp の生起についても同様の提案をしている。これらは NWGmc *lātan ~ *lē²t

(OS *lātan* ~ *lēt*, ON *lāta* ~ *lét*), **slāpan* ~ **slēp* (OS *slāpan*, OHG *slāfan* ~ *sliaf*) にさかのぼる *ā* ~ *ē*² アプラウトであり、*a* ~ *e* アプラウトの長音型として生まれたという。すなわち **haldan* ~ **held* = **lātan* ~ X、従って X = **lē*²t ということになる。

そして前記において説明のつかないケースとして挙げた *hēold*, *fēoll* についてであるが、このタイプの動詞にはさらに *fealdan* ‘to fold’, **stealdan* ‘to possess’, *wealdan* ‘to rule’, *wealcan* ‘to roll’, *weallan* ‘to boil’ の5つがあり、Jasanoff (280, 282) はこの計7つのうち3つが *w* で始まることに注目している。すなわち *w* で始まるこれらの動詞の過去形についてはゲルマン祖語のかつての重複形 **we-w(a)ld-*, **we-w(a)lk-*, **we-w(a)ll-* が圧縮により、直接 **weuld-*, **weulk-*, **weull-* となり、これらが *wēold*, *wēolk*, *wēoll* となったという。そしてこのパターンが *healdan*, *feallan*, *fealdan*, **stealdan*, そしてさらに *bannan*, *spannan*, *gangan* にも拡大され、過去形として本来予想される **benn*, **spenn*, **geng* に代り、*hēold*, *fēoll*, *fēold*, *stēold*, *bēonn*, *spēonn*, *gēong* となったという。

これは Fulk (1987: 173) がこれらのグループの *ēo* をすべて語根母音 *a* の前にかつての重複音節の母音 *e* が挿入されることによって生じた NWGmc **ea* から一律に導き出そうとしているのに対する1つの反論として注目すべきものであろう。しかし Jasanoff のこうした立場は大規模な類推的拡大を前提とすることを引き続き余儀なくしていくものであろう。

次に語根構造が Gmc *ō* + 阻害音である *blōtan* ‘to sacrifice’ ~ *blēot*, *hrōpan* ‘to shout’ ~ *hrēopon* のタイプの過去母音 *ēo* についてであるが、Jasanoff (276) はこのグループについても同じく語根母音に *w* が先行していた動詞が4つあることに注目しており、それらは *wēpan* ‘to weep’ (<**wōpjan*) ~ *wēop*, *hwōpan* ‘to boast’ ~ *hwēop* (Go *hraiuhōp*), *hwōsan* ‘to cough’ ~ *hwēos*, *swōgan* ‘to sound’ ~ *swēog* であった。この4動詞の過去形の場合、new cluster rule と圧縮により、**wewōp*, **hwewōp* (<**h^weg^wōp*), **hwewōs* (<**h^weg^wōs*), **swewōg* (<**swezwōg*), そしてさらに **we-wp*, **hwe-wp*, **hwe-ws*, **swe-wg* を経て **weup*, **hweup*, **hweus*, **sweug* となり、結局 *wēop*, *hwēop*, *hwēos*, *swēog* となったという。そしてこのパターンが *blōtan*, *hrōpan*, さらに *verba pura* と呼ばれる動詞群 *blōwan* ‘to bloom’, *grōwan* ‘to grow’, *hlōwan* ‘to low’, *rōwan* ‘to row’, *spōwan* ‘to succeed’ にも広まった結果、*blēot*, *hrēopon*, *blēow*, *grēow*, *hlēow*, *rēow*, *spēow* が生まれたという。*verba pura* の語根末の *w* の出現は古英語における革新であり、もとの形は **blōan*, **groan* 等々であったとされる。ただし *flōwan* ‘to flow’ ~ *flēow* についてはもともと *w* を有する語根形であったとされる (Seebold: 204)。

この動詞群の *ēow* による過去形の形成については Jasanoff (278) の主張するように、例えば **blōan* の過去単数は重複形ではなく、*eu* の導入により **bleu* となり、**bleu* の本来の発達形は *blēow* ではなく **blēo* であったと考えられる。このことは Gmc **knewan* > **kneu* > OE *cnēo* ‘knee’ (OS, OHG *knio*, Go *kniu*) という発達形からも裏付けられるであろう。*cnēo* という本来形と併存する *cnēow* については、Campbell (1959: 57, 233) の言うように、**kneu* に屈折接辞の母音が後続したため **knew-V* のように **kneu* の *u* が *w* となった発達形 *cneow-* (属格単数 *cneowes*, 与格単数 *cneowe*, 属格複数 *cneowa*, 与格複数 *cneowum*。o は渡り音) の影響によるものであろう。従って同様に **blōan* の過去複数も Jasanoff (278) の仮定する **bleu-un* > **blewun* > (e と *w* との間に渡り音が発生) **bleuwun* > OE *blēowon* ではなく、**bleu-un* > **blewun* > (e と *w* との間に渡り音が発生) OE **bleowun* となるのが本来の発達であったと考えられるのである。従って Jasanoff のこの前提に立つのであれば、過去単数の *w* は過去複数の影響であるとする指摘は正しいが、過去複数の母音が本来予想される *eo* ではなく *ēo* となっているのは本来の単数形 **blēo* の影響ということになるであろう。

次に語根母音に NWGmc *ā* を有する *verba pura* についてであるが、Jasanoff (278f.) は、その過去母音は NWGmc **lātan ~ *lē²t* のパターンをまねた *e²* であると考え。blāwan (<NWGmc **blā-an*) ~ blēow, blēowon を例に取ると、その過去複数 **blē-un > *blēwun* となり、そして *w* が単数 **blē* にも及んだため **blēw* となり、さらに *ē* が blōwan- 型の影響で *ē* が *eu* に取って代わられた結果、blōwan の過去形と同一の blēow, blēowon となったという。しかしこれらは **blēw*, **blēwun* からの直接の発達形であった可能性も否定できないのではないだろうか。

Jasanoff の理論を中心に進めてきた考察を終えるに当たり、最後に注目しておきたい例が *swāpan* ‘to sweep’ ~ *swēop* である。同族語には OS *swēpan*, ON *sveipa* があり、これらは NWGmc **swaipan* に由来する。Jasanoff (277) が指摘するように、もしこの過去形が語根母音前位置への *e*-挿入による形成であったならば、*swēop* ではなく **swē²p > *swēp* となっていたはずであり、また現にこれを反映した OS *forswēp* という例も見られる。そこで Jasanoff は、*swēop* は *eu*-型の過去形の影響でない限り、前記の同じく語根母音に *w* の先行する *swōgan* の過去形が **swezwōg > *swewōg > *swe-wg > *sweug > swēog* という new cluster rule と圧縮を伴う音過程の結果であったのと同様、*swāpan* の過去形も同じく **swezw(a)ip > *swew(a)ip > *swe-wp > *sweup > swēop* という音過程の結果であったとしている。

4-3 Shimozaki の理論を中心に

Jasanoff に続き、北・西ゲルマン語の7類の過去形の形成について最近新たな見解を提案しているのが Shimozaki (2012) である。

Jasanoff と同様 Shimozaki (2012: 312) も Voyles, Fulk, d’Alquen 等の主張する *e*-挿入という考え方には否定的である。Shimozaki はゲルマン語派では挿入は語幹形成の手段としては極めてまれであり、それは強変化動詞6類の **standan* ‘to stand’ における *-n-* が唯一の例であり、語幹初音と語根母音との間への挿入はゲルマン語派ではまったくなじみのない形成法であるとしている。

Jasanoff が新しい *a ~ e* アブラウトの伝播を7類の非重複過去形全体の出発点としていたのに対し、Shimozaki はこれでは説明がつかないのが語根母音 Gmc *au* 以外の語根母音を有するグループにおける *ēo* であると考え。Jasanoff は **waldan*, **walkan*, **wallan*, **wōpjan*, **hwōpan*, **hwōsan*, **swōgan*, **swaipan* の重複過去形からそのまま生じた *ēo* が広まったためとしているのに対し、Shimozaki (2012: 315) は、**wewald*, **wewōp*, **h^weg^wōp*, **sezwōg (> *swewōg)* からそれぞれ **weuld*, **weup*, **hweup*, **sweug* を導き出すために Jasanoff (276) が提案している new cluster rule という音韻規則は *ēo* を表面的に導き出すために彼が作り上げたものでしかないと批判している。

Jasanoff の主張とは逆に、ゴート語、そしてゲルマン祖語においてもまた重複過去形の強勢は重複音節ではなく語根にあったが、それが北・西ゲルマン語では第1音節である重複音節に移ったとする Voyles の見解を Shimozaki は支持し、こうして生じた強勢の位置の違いがゴート語と古英語との発達の違いを引き起こしたと考える。

まず Shimozaki (2012: 317f.) は、強勢がまだ語根にあった最初の北・西ゲルマン語における段階としての重複過去形を次の5つのタイプに整理している: a) **laikan ~ *lelaik*; b) **haidan ~ *hegald*; c) **blōtan ~ *beblōt*; d) **hrōpan ~ *hegrōp*, **swōgan ~ *sezwōg*; e) **spannan ~ *spespann*。

そして強勢が重複音節に移った次の段階では特に b), c), d) に注目したい。タイプ b) の過去形では本来の語根初音においてヴェルネルの法則により別の子音 *-g-* が出現しただけに、むしろ語幹初音 *h-* が語根初音であるのかのように感じられたのではないだろうか。これに対し、タイプ c) の過去形では本来の語根初音 *-bl-* が依然としてそ

のまま語根初音として認識されていたものと思われる。しかしタイプ d) の過去形では語幹初音は h-, s-, そして本来の語根初音は -gr-, -zw- であった。すなわち、どちらにも現在形そして過去分詞と同じ本来の子音群 hr-, sw- は現れなかったことが変化表内の統一性をそこなった。このように語根初音が確認しにくくなり、7 類として一貫した解釈が妨げられたため、タイプ c) とタイプ d) では語幹初音が語根初音と見なされるようになり、現在形と過去分詞の語幹初音と同じ子音群が過去形の語幹初音に置かれることとなった (*blōtan ~ *beblōt > *blōtan ~ *bleblōt; *hrōpan ~ *hegrōp > *hrōpan ~ *hregrōp; *swōgan ~ *sezwōg > *swōgan ~ *swezwōg)。

こうしてかつての重複過去形は、語幹初音が語根初音と再解釈されたために改変され、さらにかつての語根母音が弱化した結果、稀有で不安定な状態となった。Shimozaki (321) は強変化動詞における時制変化の手段としてアブラウトが支配的であった北・西ゲルマン語では、こうした形態上の逸脱が新たなアブラウトの生起を促進したと考える。そこで Shimozaki は、e- 挿入説ではその出発点として重視されてきたと同じく母音で始まる動詞が重要な役割を果たしたとしている。ただし、その実証例を Seebold (1970)、Shimozaki (321) で確認すると、OHG eihhan ‘zuerkennen’ (Go -aikan ~ -aiaik); OE ēaden ‘gegeben’、OS ōdan ‘geschenkt’、ON auðinn ‘verliehen’; OE ēacen ‘weit, mächtig, schwanger’、OS ōkan ‘schwanger’、OHG auhhan ‘hinzufügen’、ON auka ‘vermehren’ ~ iók (Go aukan ‘sich mehren’ ~ aiauk); ON ausa ‘schöpfen’ ~ iós; ON aldinn ‘alt, altmodisch’ (Go usalþans ‘altersschwach’) と少数であり、しかも古英語形はわずか 2 例であり、いずれも過去分詞である。しかし Shimozaki (321f) はこれらが重要な出発点となったと主張する。

Shimozaki のここまでの論述であれば、Voyles、Fulk、d’Alquen の見解との基本的な違いはないとも言えるが、Shimozaki (322-325) は過去母音の形成について e- 挿入説とは別のプロセスによる提案をしている。彼はまず *aukan を出発点として議論を進めている。

最初の段階である *e-*auk* は第 1 音節に強勢が移ることによって本来の語根母音 *au* が弱化すると、重複形とはもはや認識されることはなくなり、1 つのアブラウト交替形のようなものと見なされた。すなわち *e-*auk* は *e-*ök* (・は音節境界)、さらに *e-*ok* となり、e-*o* は現在形の語根母音 *au* と交替しているかのように見えた。そうなるのと音節境界は消失し、縮合が起こった結果 *eok となった。そして同じく *e-*aik* の場合、本来の語根母音 *ai* が *ē*、さらに *e* に弱化し母音縮合が起こった結果 *ē²k となった。

OE *ēo* は通常は Gmc *eu* の反映であり、7 類においても古英語のみに関する限り、*ēo* は *eu* の反映と見なしでも問題ないであろう。しかしそう見なした場合、OHG *loufan* (OE *hlēapan*, Go *hlaupan*) の過去複数が、本来予想される次音節の *u* の影響による *eu* > *iu* を反映する **liufun* ではなく *liofun* (OE *hlēopon*) であること、そして ON *auka*, *hlaupa* の過去形についても、本来予想される子音 *k*, *p* の前での *eu* > *iu* > *iú* を反映する **iúk*, **hliúp* ではなく *iók*, *hlióp* であることから、7 類において OE *ēo* に対応する OHG *io*, ON *ió* は Gmc *eu* の反映とは同一視できない別のものであったと考えざるを得ないであろう。Voyles、Jasanoff は 7 類の OE *ēo* を Gmc *eu* とは区別せずに一貫して NWGmc *eu* と表記しているが、厳密に言えば、Shimozaki の表記による *eo* のような、*eu* とは区別した表記をする方が望ましいと思われる。

従って非重複形の生起の出発点となったとされる母音で始まる動詞 **aukan* の過去語幹は **eok*- であった一方、**hlaupan* の過去語幹はまず (**hlelaup*- > **hleglōp*- >) **hleglop*- であったと考えられる。そして **hlaupan* の過去語幹としては逸脱しているかのようなこの状況は、新たなアブラウトによって関係づけられることにより解消したという。すなわち **aukan* : **eok*- = **hlaupan* : X、すなわち X = **hleop*-。こうしてアブラウトのない異常な過去語幹形 **hleglop*- は排除されていくことになるという。

しかし母音で始まる *e¹Can、*ōCan という形の動詞のないグループの *slē¹pan、*blōtan の過去語幹としては2音節のそれしか存在しなかった。すなわち *hlaupan のような場合は2音節の過去語幹が *aukan の影響で1音節の二次形 *hleop- を有していたのに対し、*slē¹pan、*blōtan のように1音節の二次形がないのは不安定な状況だったのであろう。この状況は母音で始まる動詞のなかったこれらのグループの中に新しいアプラウトを類推的に作り出すことによって解消されたと Shimozaki (323f) は考える。2音節の過去語幹 *hleglop- とその1音節の二次形 *hleop- との間には遺伝的な関係はなかったものの、共時的には *hleglop- の語中子音 -gl- の削除と母音縮合により *hleop- が形成されたかのような感じを与えたのではないだろうか。従って *slē¹pan、*blōtan についてもまた語中子音の削除と母音縮合により1音節の過去語幹が形成されるようになったのではないだろうか。すなわち *hleglop- : *hleop- = (*slezlē¹p- >) *slezlep- : X、従って X = *slē²p- (>OE slēp)。同様に *hleglop- : *hleop- = (*bleblōt- >) *bleblot- : X、従って X = *bleot- (>OE blēot)。そして OE hēt も (*hegait- > *hegēt- >) *heget- から同様の音過程により形成されたということになる。

他方、OE healdan、feallan、gangan のグループ (fōn ‘to take’、hōn ‘to hang’ < *fanhan、*hanhan を除く) の過去母音は hēold、fēoll、gēong のように ēo であるのに対し、対応する OHG haltan、fallan、gangan の過去形は ē² を反映する hialt、fial、giang である。Jasanoff (282) は、いったんは a ~ e アプラウトの導入により *helt、*fell、(実在形) geng となったのちに ē² のタイプに移行したためとしているが、OHG ia は、Shimozaki (324) の主張どおり、あくまでも e と語根母音 a との縮合による ē² の反映であると考えられる。それでは対応する古英語形では ē² を反映する ē ではなく ēo となっているのはなぜであろうか。それは古英語では縮合の段階での語根母音 a は、それが無強勢となった結果を反映する OE þone、on、onwold (onwald、onweald)、hlāford (hlāfard) のような別の実例が示すように、単一の鼻音の前や流音+子音の前では o に近い音となっていたためと Shimozaki (325) は考える。

それでは、fōn、hōn の過去形が逆に ēo ではなく ē² を反映する fēng、hēng となっているのはなぜであろうか。Shimozaki (325f) は無強勢音節における a+n+無声摩擦音という同様の環境で直説法現在複数の接辞が示す *-anþ > *-āþ > -aþ という音過程を根拠として、次のような成立過程を提案している。すなわち fōn の場合、過去単数の *febanh- > *febāh- > *febah- > *fē²h- と過去複数 *febang- > *febong- > *feong- との混交により *fē²ng- が生じ、さらにそこから fēng、fēngon が生じたとしている。まさに同じことは hōn についても当てはまることになる。そして短母音形 feng、heng は ē が ng の前で短化した結果であると考えられる。このかつて存在していたかもしれない *feong- がもし消失せずに保持されていたならば、それは OE *fēongon となっていたであろう。従って gēong、hēold のような、その語根構造が Gmc a+鼻音または流音+子音であるグループの過去形における ēo は Fulk (1987: 173) の主張する e+a ではなく、Shimozaki の提案する e+同じく o に近くなったもとの語根母音 a の弱化音に由来するということになるであろう。他方、OS gieng、fieng、hield、OHG giang、fiang、hialt に見られる ē² の反映は、Jasanoff (270) の主張するような *hē²t- 型、*lē²t- 型の影響によるものではなく、e と弱化による変化のないもとの語根母音 a との縮合という本来の結果を反映するものであろう。

従って Jasanoff が新しい a ~ e アプラウトの生起に起因する短母音 e を反映すると主張する OS geng、feng、heng、held、OHG geng、feng、heng、helt、ON gekk、fekkk、hekk、helt というタイプの過去形は Shimozaki (328) の主張するように、実は e+a に由来する ē² が鼻音または流音+子音の前で短化するという自然な音変化の結果であったのではないだろうか。

また Shimozaki (327) は、verba pura のうち語根母音が Gmc ē¹ を反映する sāwan ‘to sow’ ~ sēow (Go saian

~ saiso) を例に取り、*sēow* は **sezō* > **sero* > **seo* > **sēow*- という音過程の結果であり、*w* は複数形のような語尾母音を有する形において *eo* と語尾母音との間に生じた渡り音であるとしている (**seo*- + *-un* > **seowun* > OE *sēowon*)。しかしこれはアプラウトを伴わなかった重複形 **sezē*¹- > **seze*- > **sere*- > **sē*²- > **sēw*- > (*ē* と渡り音 *w* との間にさらに渡り音 *o* が生じ) **sēow*- という音過程の結果であったかもしれない。そして同様のことは前述の *blāwan* ‘to blow’ の過去形 *blēow*、*blēowon* についても言えるであろう。すなわち *blēow* は **bleblō* > **bleo*- > **blēow*- という、あるいはアプラウトを伴わなかった重複形 **bleblē*¹- > **bleble*- > **blē*²- > **blēw*- > **blēow*- という音過程の結果であったかもしれない。

最後に Shimozaki (328) は、Jasanoff (277) も問題として取り上げた *swāpan* ‘to sweep’ の過去形 *swēop* の生起については、Jasanoff の提案する **swezwaip* から自動的に **swewaip* を導き出す new cluster rule を否定し、次のように説明している。本来予想される **swēp* となっていないのは、**lelōt* を **lelt* (> *leort*) へと導き、さらにこれにならって類推的に **hegait*、**lelaik* を *heht*、*leolc* へと導いた語根母音の削除が **swezwaip* にも働いたためであるが、**swezwaip* が *swēop* となるにはさらに *Go izwis* とその対応形の OE *ēow* (OS、OHG *iu*) との関係から導き出される *-zw* > *-ww* > *-uw* という同化的な変化が母音の削除に先立って必要である。すなわち Shimozaki は **swezwaip* > **sweuwaip* > **sweup* という過程を経て *swēop* となったと考える。従って *swēop* の場合、成立過程としてはむしろ *heht*、*leolc* のようなかつての重複音節のなごりを留める *heht*、*leolc* のような例に近いということになるであろう。

4 - 4 OE *cnāwan* と Hitt *kane/išš-zi*

過去形の成立過程に続いて取り上げてみたいのが 7 類の中の 1 動詞の現在形についての歴史的な問題である。その動詞とは *cnāwan* ‘to know’ であり、その同族語である古高地ドイツ語形も古ノルド語形も語根母音 *ā* を有することから、これは Gmc **knē*¹- に由来し、*cnāwan* は Gmc **knē*¹*an*- > **knæwan* > *cnāwan* という音過程の結果であることがわかる。そして同根語として母音に関してはアプラウトの関係にあるように見える Lat (g)*nōscō*、Gk *gignōskō* との、また子音に関しては Skt *jñā*- と対比により、理論的には IE **gnē*- を反映するものであり、しかも特に同根語の Lith *pa-žintas* ‘bekannt’ から見て喉音を含んだ語根に由来し、その基本形である *e*-階梯が IE **gneX*- であることは明らかである。すなわち Gmc **knē*¹- は IE **gneX*₁- を反映するものではないかということになるであろう。しかし Lat (g)*nōscō*、Gk *gignōskō* については Harðarson (1993: 76)、Beekes (1995: 228) のようにゼロ階梯 IE **gnX*₃-*ske/o*- に由来するという見方と、Sihler (1995: 507) のように *e*-階梯の IE **gneX*₃- に由来するという見方もあり、いずれにせよ *gnō*- は喉音 *X*₁ ではなく *X*₃ の存在を反映しているとする見方が一般的である。

このように *o* の音質を与えるはずの *X*₃ を有し、従って本来 IE *ē* (> Gmc *ē*¹) が生じるはずのないような状況下で OE *cnāwan* が同根語として存在しているのはなぜであろうか。Jasanoff (1988) によると、これは **gneX*₃- の延長階梯 **gnēX*₃- に由来し、しかも *ē* は長母音であったため、Eichner の法則により、*X*₃ が隣接していてもその音質に影響はなかったのだという。

さらに IE **gnēX*₃- > **gnē*- を裏付ける他の語派の同根語として Jasanoff (1988: 238) が挙げているのが Hitt *ganešzi* ‘recognize, know’ (3 人称単数現在) であり、これは athematic な IE **gnēX*₃-*s-ti* の反映であるとしている。なお接尾辞 *-s-* については、Harðarson (76) は起動相 (inchoative) を表す働きをしていたのではないかとしており、Jasanoff (1988: 238) はこれを *s*-現在と呼んでいる。

cnāwan のもととなった Gmc **knē*¹- の成立過程について、Jasanoff (1988: 238) は次のように説明している。IE

*ǵnēX₃-s-ti が現在形 Gmc *knē¹san- となり、過去形は現在時制を表す -s- の失われた、そして重複接頭辞とアブラウトを伴う *keknō(w)- だったのであり、これが *kneknō(w)- を経て OE cnēow となった。現在形においては -s- が -je/o- に取って代わられた結果、*knē¹san- は *knē¹jan- > NWGmc *knājan、さらに OHG irknāen、ON kná となり、そして OE *knā-an > cnāwan となったという。

これに対し Harðarson (79-81) のように、Gmc *knē¹- は印欧祖語にさかのぼるものではなくゲルマン語派において初めて生じたものであり、これは現在形には本来の IE eX₁ > ē を、過去形にはそのアブラウトによる IE oX₁ > ō を有していた他の動詞 (cf. Go saian ~ saisō、OE sāwan ~ sēow) をまねた逆成 (Rückbildung) によるものとする見方もある。

OE cnāwan、Hitt ganešzi が延長階梯の IE *ǵnēX₃- に由来すると主張する Jasanoff に対し、Kloekhorst (2009) は本来ヒット語の 3 人称単数現在形は e- 階梯の IE *ǵnēX₃-s-ti であったと主張する。しかし *ǵnēX₃-s-ti は音韻法則的には本来 ganešzi とはならない。なお、Kloekhorst は ganešzi ではなく kane/išzi と表記しており、母音 e/i の音価は [i] であったという (本稿でも以後 kane/išzi と表記する)。それでは Jasanoff が IE ē の反映と見なす、kane/išzi のこの e または i と表記される母音の真の起源は何であろうか。そしてそれが OE cnāwan の語根母音 Gmc ē¹ の起源の解明につながるのであろうか。

Kloekhorst (2009: 246) は kane/išzi を説明するために、同様の例として Hitt tamāšzi ~ tame/iššanzi ‘to (op)press’ に注目し、これらは IE *dmēX₂-s-ti ~ *dmX₂-s-énti に由来し、この単数形と複数形との間に見られる交替 ā ~ e/i は e- 階梯 ~ ゼロ階梯というアブラウトの反映であると考ええる。すなわち kane/išzi の場合と同じく e または i と表記されるこの母音が Jasanoff の主張する ēX ではなくゼロ階梯を反映しているという。

もし単数形が ēX を反映する IE *dmēX₂-s-ti であったならば、それは tamāšzi ではなく *tamēhšzi となっていたはずであると Kloekhorst (246) は主張する。また複数形についても tame/iššanzi と同様の例として Kloekhorst (246f.) は kallišš-^{zi} ~ kališš- ‘to call’ (Lat calāre、Gk kaléō) < IE *kelX₁- を挙げ、tame/iššanzi が *dmX₂-s-énti を反映しているのと同じくそれは *CRXsV > Hitt CaRe/iššV という音韻法則の結果であるとしている。すなわち e/i は音結合 *CRXsV において二次的に発生した挿入母音 (anaptyctic vowel) であったという。従って複数形 gališšanzi はゼロ階梯の IE *klX₁-s-énti であったということになる。他方、単数形 kallišš- は e- 階梯の IE *kelX₁-sC- > kallišta (3 人称過去単数) という音過程によるものであるとして、Kloekhorst (250) はこれを *VRXsC > Hitt VRRe/išC という音韻法則の結果と見なす。

kane/išš- は共時的にはアブラウトは示していないが、3 人称複数現在 kane/iššanzi は tame/iššanzi、gališšanzi と同様 *CRXsV > Hitt CaRe/iššV という音韻法則を示唆するものであり、ゼロ階梯の *ǵnX₃-s-énti を反映するものと考えられる。他方、単数形は本来 *ǵnēX₃-s-ti であったはずであり、これは Hitt *kanāšzi となるのが本来の規則的な発達である。すなわち本来あるはずの *kanāšzi ~ kane/iššanzi という交替は前記の tamāšzi / tame/iššanzi を思い起こさせるものである。従って Kloekhorst が主張するように、本来あったはずの交替 *kanāšzi ~ kane/iššanzi がゼロ階梯の複数形 kane/iššanzi に基づき kane/išzi ~ kane/iššanzi へと水平化されたものと考えられるのである。

以上のことから Gmc *knē¹- (OE cnāwan) における ē¹ と Hitt kane/išzi における e/i とは、Jasanoff の主張に反し、歴史的には無関係であったと思われる。

5. おわりに

本稿ではまず、印欧祖語にさかのぼることが困難な例の中でも、特に古英語の強変化動詞とその同根語らしき語についての考察を試みた。この点について特に Vennemann がセム語との言語接触による借用の可能性を指摘している点に注目した。しかもゲルマン語子音推移以前と思われるケースとそれ以後と思われるケースに分類し、またセム語族自体に見られる語根子音の揺れも考慮することにより、この言語接触という提案の正確さはさらに増しているようである。もちろんこれでセム語起源であることが完全に証明できているとは言い難いが、起源のはっきりしない語についての1つの新しい提案であり、今後もこうしたアプローチによる試みが前進していくことを期待したい。

そして Vennemann、Mottausch が取り上げた OE *dragan* と Lat *trahere* との関係についてであるが、Vennemann の主張するように、両者は意味が同じでも形の異なるセム語根に由来すると見なすことで一応の説明はつくように思われる。他方、Mottausch は両者をもっぱら印欧祖語から同根語として導き出すために、実在した直接的な痕跡のない IE **trégh-mi/*trgh-mé* という athematic なタイプの変化形を出発点として仮定し、独自の音韻法則とプロセスによる説明を試みている。Mottausch の説明は、自身も認めているように、こうした出発点はもちろん、子音変化についても他に類例を見出し難い遠隔同化、そして母音 *a* に関してはイタリック語派からの影響といったように、特定の例のみを説明するための *ad hoc* な面が強いことは否めないであろう。

続いて、強変化動詞と同根の *ti-* 抽象名詞とそれ以外の若干数の派生語の実例を通して強変化動詞の変化表の枠外でのアプラウトの一端について考察を試みた。そこには純粹に印欧祖語にさかのぼる究極的とも思われる例もある一方で、その形成のされ方としては、ゼロ階梯語根に基づく本来の形成の仕方から、ゲルマン語派、古英語の段階になると、本来のゼロ階梯から必ずしもそうではなくなっている過去分詞の母音度に基づく形成のされ方に移行していると言ってよいであろう。

強変化動詞のアプラウトは印欧祖語というレベルから時制の変化、数、人称に応じ個々のクラスの動詞が従うべき形へと再編され固定されたものとなっていたと考えられる。ましてや実際に強変化動詞の中に一部セム語起源のものが含まれていたとすれば、しかも OE *pliht*、G *Pflicht* のように *ti-* 抽象名詞と思われるものまでもが接辞 **t* も含めセム語起源であったとすれば、なおさらそうであったと言えるであろう。

最後は強変化動詞 7 類について論じたが、7 類の過去母音の形成過程について Jasanoff (2007) は主流となっていた感のある *e-* 挿入という理論を否定し、ゴート語における重複音節はもはや無強勢ではなくなっており、あくまでもゲルマン語派の特徴である第 1 音節としての強勢を有していたとしており、また北・西ゲルマン語と同じく *e-* 挿入による単音節の過去形の形成につながりそうなこうした状況下にあってもゴート語が 2 音節を維持していたことから、北・西ゲルマン語のケースは *e-* 挿入による結果ではなく新たに導入されて *a ~ e* アプラウトにより改変されたことに端を発した結果であったとしている。

しかしゴート語がまとまって文献上に姿を現していた時期は北・西ゲルマン語のそれよりもさらに古く、ゴート語の場合も北・西ゲルマン語と同時期には同様の過程をたどっていた可能性も否定できないのではないだろうか。しかもゴート語の重複音節にすでに強勢が移っていたかどうかは疑わしく、また仮にそうであったとしても、ゴート語形がその時点で重複音節をまだ維持していたからと言って、それが重複音節と語根の母音の縮合がその後も起こらなかったという確かな証拠となるとは考えにくい。

古英語を含む北・西ゲルマン語における 7 類の過去母音の形成について、*e-* 挿入を Jasanoff と同様に否定はしながらも、実証例も少なく不完全とは言え母音で始まる動詞における重複音節の母音と語根母音の縮合を出発点とし

た Shimozaki による理論が、北・西ゲルマン語全体はもちろん、個別言語的なレベルでの相違も含め、すべてをより包括的に説明することに成功しているのではないだろうか。

そして7類についての議論の最後に、(Gmc *knē¹- >) OE cnāwan における語根母音 ā について、これを Hitt kane/išzi における e/i と同一視することにより説明しようとした Jasanoff (1988) の理論を取り上げたが、kane/išzi についての Kloekhorst の主張から判断すると、両者は同根語ではあっても後者はゼロ階梯に由来するものであり、Eichner の法則を前提に Jasanoff が cnāwan の起源として主張する延長階梯の IE *gnēX₃- を示唆するものとは考えにくい。それではこの想定外とも言える OE ā の起源をどこに求めるべきなのであろうか。Kloekhorst もこの点については何も述べてはいない。やはり cnāwan は、Jasanoff の主張する IE *gnēX₃- が原点なのであろうか、あるいは Harðarson の言うように Go saian ~ saisō- 型の verba pura に基づく逆成なのであろうか。今後のさらなる研究成果が求められるところであろう。

[参考文献]

- Bammesberger, A. 1990. *Die Morphologie des urgermanischen Nomens*. Heidelberg: Winter.
- Beekes, R. S. P. 1995. *Comparative Indo-European linguistics: An introduction*. Amsterdam: Benjamins.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Casaretto, A. 2004a. “*ti*-Abstrakta und Grammatischer Wechsel im Gotischen.” *Indogermanistik – Germanistik – Linguistik: Akten der Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft, Jena 18-20.09.2002* (M. Kozianka, R. Lühr & S. Zeilfelder, eds.), 49-74. Hamburg: Dr. Kovač.
- Casaretto, A. 2004b. *Nominale Wortbildung der gotischen Sprache: Die Derivation der Substantive*. Heidelberg: Winter.
- d’Alquen, R. 1997. “Non-reduplication in Northwest Germanic: The problem that will not go away.” *NOWELE* 31/32, 69-91.
- Fulk, R. D. 1987. “Reduplicating verbs and their development in Northwest Germanic.” *PBB* 109, 159-179.
- Harðarson, J. A. 1993. *Studien zum Urindogermanischen Wurzelaorist und dessen Vertretung im Indoiranischen und Griechischen*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Jasanoff, J. 1988. “PIE *gnē- ‘recognize, know’.” *Die Laryngalthorie und die Rekonstruktion des indogermanischen Laut- und Formensystems* (A. Bammesberger, ed.), 227-239. Heidelberg: Winter.
- Jasanoff, J. 2007. “From reduplication to ablaut: The class VII strong verbs of Northwest Germanic.” *HS* 120, 241-284.
- Kloekhorst, A. 2009. “Hittite *kane/išš-zi*, to recognize’ and other *s*-extended verbs.” *Protolanguage and Prehistory: Akten der XIII. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, vom 11. bis 15. Oktober 2004 in Krakau* (R. Lühr & S. Ziegler, eds.), 244-254. Wiesbaden: Reichert.
- Kuryłowicz, J. 1968. *Indogermanische Grammatik II: Akzent-Ablaut*. Heidelberg: Winter.
- Mailhammer, R. 2007. *The Germanic strong verbs: Foundations and development of a new system*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Mailhammer, R., S. Laker & T. Vennemann. 2003. “PGmc. ⁺*drepa-*, G *treffen* ‘to hit’.” *Studia Etymologica*

Cracoviensia 8, 103-110.

森 基雄. 2012. 「重複動詞とその古英語における発達」『奈良産業大学地域公共学総合研究所年報』第3集、109-117.

Mottausch, K.-H. 1993. "Zwei verkannte germanisch-italische Isoglossen." *HS* 106, 148-175.

Pokorny, J. 1959. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. Bern: Francke.

Rix, H. 2001². *Lexikon der indogermanischen Verben*. Wiesbaden: Reichert.

Schaffner, S. 2001. *Das Vernersche Gesetz und der innerparadigmatische grammatische Wechsel des Urgermanischen im Nominalbereich*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.

Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.

Shimozaki, M. 2012. "Die Ablaute der 7. Reihe starker Verben im Nord- und Westgermanischen – Ursprung und Unterschiede in den Einzelsprachen." *PBB* 134(3), 307-329.

Sihler, A. L. 1995. *New comparative grammar of Greek and Latin*. New York-Oxford: Oxford University Press.

Vennemann, T. 1998. "Germania Semitica: ⁺plōg-/pleg-, ⁺furh-/farh-, ⁺folk-/flok-, ⁺felh-/folg-." *Deutsche Grammatik – Thema in Variation: Festschrift für Hans-Werner Eroms zum 60. Geburtstag* (K. Donhauser & L. M. Eichinger, eds.), 245-261. Heidelberg: Winter.

Vennemann, T. 2000. "Zur Entstehung des Germanischen." *Sprachwissenschaft* 25, 233-269.

Vennemann, T. 2002a. "Germania Semitica: Pre-Gmc. ⁺at- in E *maiden*, G *Magd*/ *Mädchen*, Goth. *magaps*." *ABaG* 56, 1-16

Vennemann, T. 2002b. "Germania Semitica: Gmc. ⁺drag-, ⁺trek- (Lat. *trah*-, Gk. *τράχ*-)." *The linguist's linguist: A collection of papers in honour of Alexis Manaster Ramer*. 2 vols. Vol. II. (F. Cavoto, ed.), 437-446. Munich: Lincom Europa.

Vennemann, T. 2002c. "Key issues in English etymology." *Sounds, words, texts and change: Selected papers from the Eleventh International Conference on English Historical Linguistics, Santiago de Compostela, 7-11 September 2000* (T. Fanego, B. Méndez-Naya & E. Seoane, eds.), 227-252. Amsterdam: Benjamins.

Vennemann, T. 2004. "Note on the etymology of PGmc. ⁺smītan and ⁺smīpaz (E *smite*, *smith*, G *schmeißen*, *Schmied*, etc.)." *Per aspera ad asteriscos: Studia Indogermanica in honorem Jens Elmengård Rasmussen, sexagenarii Idibus Martiis anno MMIV* (A. Hyllested, A. R. Jørgensen, J. H. Larsson & T. Olander, eds.), 601-613. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.

Vennemann, T. 2006. "Grimm's Law and loanwords." *TPS* 104, 129-166.

Voyles, J. B. 1980. "Reduplicating verbs in North-West Germanic." *Lingua* 52, 89-123.

Vries, J. de. 1962². *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*. Leiden: Brill.

Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.